



校訓

郷土を愛し  
明るく素直で  
たくましく

文責：校長 川内康範

今年もやります……

### 夏休みの宿題です。

## 「身近な大人にインタビュー」

#### 【目的】

○身近な大人が人生の分岐点で何を考え、どのような道を選択してこられたか、聞き取りを行い、人生の先輩の生き方を知る。

○自分自身の個性や適性を見つめ、将来の生き方について考える。

#### 【レポートの内容】

- ・聞いた人(あなたとの関係)
- ・インタビューの内容
- ・自分の将来について今思うこと

保護者の皆さんは、ご自身が中学生の頃、今現在の自分のことが想像できたでしょうか。自分の将来のことをどんな風に考えてこられましたか？

私自身はもう40年以上も前になります。中学生の頃は将来のことなどほとんど考えていなかったと思います。ただ部活をして目の前の勉強を少しして……、親から「勉強せんば」とは言われていました。のんきに暮らしていたなあと思いません。

でも、今の中学生には自分をしっかり見つめさせ、この先の自分の生き方について考える習慣を身につけさせたいと思います。

生きていく上で私たちは、学校や職業の選択だけでなく、様々な選択をします。だれとどこに住んで、どんな活動をするのか。その後も出会いや様々な条件によっていろいろな選択をします。親と一緒に住むのか。離れるのか。実家の仕事を手伝うのか。大島で仕事をするのか。何年間かは島外で働いて、その後大島に戻る計画にするのか。などなど、それらのすべてが選択であり自分の『生き方』です。そこで、まずはいろいろな人の『生き方』から学んでほしいのです。

ところで、保護者の皆さんは、親として子どもの人生についての思い・願いを語られることはありますか。今回、子どもたちに見出しのような夏休みの宿題を出しています。ご家族の誰かがインタビューを受けることになるかもしれませんが、その際は子どもの将来のためと思ってご協力いただければ幸いです。そして、親としての思いを存分に語ってみたいとはいかがでしょうか。

話は少し変わりますが、「リズムダンスふれあいコンクール」の審査員でもある鈴木寛先生が次のようなことを話されています。

中学校というのは子どもの終わり、大人の始まりで、14歳ぐらいというのは本当に大事だと思っただけですね。思春期にも入ってくるし、いろいろなことを考え始めるし、ここで初めて社会というものを見ていく。この一番大事な時に、縁の下の力持ちで社会を支えている多数の存在とリアリティーをもって、どれだけ出会っておくかということがすごく大事ななと思います。

どうやって中学校の時に自己肯定感、自己効力感を醸成するかというところは、すごく重要で、それには小さな成功体験の積み重ねなんですけれども、その前に、憧れの存在との出会いとい

うのがすごく重要です。(中略)多様なロールモデル、憧れの存在、本当はそれが憧れの高校生、憧れの大学生、憧れの20代、憧れの30代、憧れの40代、憧れの50代というふうにも多様な斜めの関係(教える、教えられる堅苦しい関係ではなく、気軽に話しながら一緒に花を植えたり汗を流したりできる、親戚や地域の方などとの関係を鈴木さんは「斜めの関係」と呼んでいます)があるとベストですが、憧れの存在はほとんど変わっていいと思うんです。ただ、必ずしも一人が二人憧れの存在がいれば、子どもたちはその憧れの存在に近づこうと思つて、自発的な学びが生まれると思います。

みなさんの周りには、いつもは冗談ばかり言っているけど、仕事の話をしたら熱くなる、というような憧れの人がいませんか？

私は、魚をさばかせたらすごい○○さん、絶品の鶏ゴボウ汁を作る○○さん、家に帰っても仕事がつきつかったとは言わない○○さん、伝建地区の改修を誇りをもって行っている○○さんを知っていますが、みなさん、私にとって憧れの存在です。

### 『君の臍臓を食べたい』を読みました。

これから読む人のために、ストーリーは言いませんが、登場する女子高生のセリフを紹介します。

「違つよ。偶然じゃない。私達は、皆、自分で選んでここに来たの。君と私がクラスが一緒だったのも、あの日病院にいたのも、偶然じゃない。運命なんかでもない。君が今までしてきた選択と、私が今までしてきた選択が、私達を会わせたの。私達は自分の意思で出会ったんだよ。」

私はこれを読んで、「キヤリア教育の考え方だな」と思ってしまった。すみません、ヤボなことと言いましたが、素敵な本ですよ！図書室にもありますので、ぜひどうぞ。